

新・俺と蛙^{カワズ}さんの
異世界放浪記 5

くすもち

主な登場人物

コピー太郎

突如として出現した太郎の複製。

トンボ

妖精郷に住む下っ端妖精。小さいが態度はデカイ。

あまみや 天宮マカリ

あだ名はセーラー戦士。太郎のおかげで地球と異世界を行き来できるようになった。

こうのたろう 紅野太郎

本作の主人公。カワズさんによって異世界へと召喚された。魔力は800万1000。

カワズさん

自身の命と引き換えに太郎を召喚した魔法使い(500歳)。太郎によってカエル姿で蘇生させられる。

マオちゃん

魔族の頂点に君臨する魔王。オネエ系。

くろぬの 黒布さん

魔人族の女性。マオちゃんに浅からぬ因縁を持つ。

カニカマ君

異世界から召喚された中学生勇者。とある事件がきっかけでこのあだ名に。

カッーン。カッーン。ジュー……ジジジ。
鎚の打ちつけられる甲高い音がようやく終わり、真っ白な水蒸気が立ち上る中、その剣は産声を上げた。

「まあ、ひとまずお疲れさんだ」

作業を終えたドワーフの言葉を聞いて、俺、紅野太郎は感動に打ち震えていた。疲れ果て、マントも髪もよれよれだったが、俺は剣を見てドワーフ達と笑い合う。

たった今完成した剣は、他ならぬ俺がドワーフ達に依頼した一品であった。

俺は誰に言うでもなく告げる。

「説明しよう。この剣は、我が魔法によって生み出された究極金属、俺の名前を取って『タロメタル』と名付けたオリジナル鉱石によって作られている。タロメタルとは、オリハルコンなど強力な魔法金属をすべての点で上回ることを目標に、ドワーフ達との試行錯誤の結果生まれた、奇跡の鉱石なのだ！」

オリジナル鉱石による武器の製造が、今まさにドワーフによってなされ、こうして形となった。

そんな歴史的瞬間に立ち会いながら、俺は目じりの涙をこっそりぬぐう。

「なんで急に説明した？ 今日のお前はテンション高いな」

そう言つてドワーフ達は呆れていたが、俺に言わせればテンション低い方がおかしい。

「そりゃそうだ！ 念願の魔剣完成だぞ！ ここではしゃがなければ、どこではしゃぐというのか！」

「いやいや。まだ魔剣にはなつてねえよ。そいつはこれからあんたが仕上げるんだ。もうどんな魔剣にするかは考えているんだろう？ 魔法使いさん？」

挑発的に言うドワーフに、俺は待つてましたと膝を叩く。

ドワーフ達が興味を持つてくれるのならば、俺にはそれに応える準備がしっかりと出来ている。どうか、見せたかつてたまらなかつた。

「ふっふっふ。それなら心配ないさ。この世に二つとないオリジナルの魔法を付け加える予定だとも」

「ほほう。そいつはどんな魔法なんだ？」

「そうだな……闇の魔法つて知つてる？」

マイナーな魔法なため尋ねてみると、ドワーフの一人は首をかしげながら答える。

「なんか聞いたことはある……確かそいつは自爆の魔法じゃなかつたか？」

俺は肯定し頷いた。それが、現状知られている闇の魔法の一般的な使い方なのは間違いない。

「半分当たり。闇の魔法つていうのは、五属性の魔力を同時に使つて、魔力を暴走させるんだ。だから、自爆として使うなら難易度はそう高くない。死ぬ覚悟があるなら、すごい威力を出せるはずだ。それは最高に派手な花火になるだろうな」

「……やめろよ、そんなおっかない魔法付けるの」

正気か？ とドワーフ達が残念な目を向けてきたので、俺は慌てて付け加える。

「いや、だからそれは半分なんだつて。闇の魔法の使い方は自爆だけじゃない。その先があるんだ。故意に暴走させた魔力は制御することも出来るんだよ。実は」

「制御すると、どうなるんだ？」

「魔力が十倍になる。今回剣に付けるために用意したのは、闇の魔法を自動で制御する魔法だよ」

「……」

一瞬、間が出来る。ドワーフ達はおもむろに口を開いた。

「嘘だろ？」

「嘘じゃないよ」

ドワーフは心底疑っていたが、誓つて嘘ではない。

しかし、口で説明しようにも今言った以上に情報を増やしようがなかつた。そこで困つた俺は、ここで直接見せることにしたわけだ。

「ふむ、せっかくだ。用意しているから、この場でかけておこうか？」

俺は指を鳴らし、魔力が漏れ出さないように結界を張る。そして、出来上がったばかりの剣の刀身に魔法をかける準備を整えた。

集中し、基本とされる、地・水・火・風・空の魔法を思い浮かべ、まったく同じバランスになるように慎重に魔力を込めていく。

この部分にコツがあるのだが、どうやら成功したようで、俺の体は黒く染まっていった。

心臓の辺りから徐々に黒色は広がり、全身が染まる頃——変化は起こった。

俺の魔力が、爆発的に膨れ上がったのだ。その光景を見たドワーフ達は青ざめ、冷や汗を掻いて震えだした。

これはまずかったか、と俺は作業を速める。

増大した魔力で、魔剣として機能するように一気に魔法を施していく。作業を終えると、魔剣は俺の魔力で輝いた。

ドワーフ達は腰を抜き、呼吸も忘れていたようだ。俺が完全に魔力を押さえ込むと、思い出したように一斉に息を吹き返した。

「い、今のか……ヤ、ヤベー……とにかくヤバイ」

「どうやら闇の魔法のすごさは、彼らに伝わったようだ。

「だろう？ だから、真似しちゃダメだぞ？」

「当たり前だ！ 誰がするか！」

ドワーフ達が悲鳴を上げるが、無理もなかった。

まあ、それはさておき、魔剣の説明を続ける。

「更には魔王様の許可も取って、影の魔法も付ける予定。他にもいくつかあると便利そうなやつを入れておくさ」

俺が剣に付ける魔法の予定をつらつらと言うと、ドワーフ達は呆れだした。

「……そらまた、そこいらのなまくらでも無敵の魔剣になりそうだ」

「なまくらじゃあ困るよ。見た目も中身も最高って胸を張れるものにするつもりでがんばったろ？」

いやでも、ここまで長かった……ホント」

俺が魔剣を見て感慨深く呟くと、ドワーフ達にも今までの苦労が蘇ってきたようだ。

「苦労したぜ、ほんとうになー！」

「だが、やった価値は十分あった！」

「思ったより早く出来たんじゃないか？」

剣を持っているドワーフが改めて笑みを深めて言う。

「そうだなあ。いい剣になった。妙な石だったから難しい仕事だったが、満足だ」

タロメタルの話になったついでに、報酬について確認しておく。

「お疲れ様でした。本当に報酬はタロメタルと、その加工の仕方だけでいいの？ 足りなくない？」

「何を馬鹿言ってるんだ。これ以上のものはねえよ。こいつで何を作るかはおいおい考えるが……と

「ここでお前さん、その剣は自分で使うのか？」

「そう尋ねるドワーフに、俺はいいやと手を左右に振った。」

「この剣は、今度作った町のシンボリックなものにしようと思って。言ってみれば、王様の剣みたいなね！一品ものだから、いいシンボルになると思うんだよ」

「最初からそのつもりで作ってもらったのだ。」

「ちなみに仕上げの作業も、それなりに高級感を出してもらおう予定である。」

「特別なシンボルだけにぜひドワーフ製の剣にしたかったのだが、俺の返答を聞いてドワーフは渋い表情になった。」

「町と来たか。そりゃあまた大事だな。お前さんが本腰を入れているとなると、普通の町でもないんだろ。だったら……少しばかりこの剣にも箔を付けたいところだな」

「ドワーフ製で、特殊な魔法金属で作られた剣っていうだけじゃダメかな？」

「ドワーフが作ったというだけでもかなりのステータスだと思うんだけど、ドワーフの反応はどちらかといえば否定気味だった。」

「ダメじゃねえけど。それだけじゃ、ただの『いい剣』だ。ドワーフの作った武器は、数は少ないにしてもかなりある。それに、タロメタルなんて金属の知名度は皆無だ」

「あー……確かに」

「お前さんがすげえ魔法使いだっことは知ってるさ。だが、お前さん自身の名前は……有名か？」

「ゆ、有名？ い、一部では？」

「今まで何か名が轟くような武勇伝はあるか？ いや、あるんだろうが、お前さんがやったと知れ渡っているか？」

「武勇伝……シンデレラの魔法使いだったり、色んな場所で願い叶えたり。ネットを異世界に広めたり……？」

「やったことと言えば、実は目立つようなことはしていない。裏方がメインと言えるかもしれない。一番がんばった部分はパソコンの製作だが、『パソコン製作者が作った』というのは剣の箔になるのだろうか？ 疑問の余地がありそうだ。」

「基本は匿名で活動してるから、知名度があるかどうかはわかんないな。武勇伝みたいなのは少ないと思う」

「だろ。うな。勇猛とか一番縁遠そうだ」

「……うん」

「頷く俺に、ドワーフは剣を見ながら言う。」

「町やら国やらのシンボルにしたいって言うなら、やっぱり箔になるものがあった方がいい。剣なんだから出来れば武勳のようなものかいいと思うが……まあそういうのは英雄が使ってた。剣を渡す相手に期待するもんだろが……」

「うーむ……でも、箔付けのために何か斬り殺してもらおうっていうのもどうなんだろうか？」

「そこはまあ武器だからなあ。だったら、わかりやすく、知名度があるところから名前を借りるのはどうだろう。例えば王様からもらったとか、竜族の持ち物だったなんてのは、誰が聞いても説得力がある」

「……パソコンはみんな竜が配ってるのに、箔が付いてると思えないんだけど？」

「それはそれで、すげえ話だってあんたがわかっていないことに問題がある。嫌なら他でもいいさ。その手の知り合いなら沢山いるんだらう？」

「そう言うのと、いっせいに肩をすくめるドワーフ達。確かにそういう知り合いは人より多い方である。」

そして、竜に不足があるとかはまったくない。

「嫌じゃないさ。竜か。そうだな……いっちょ頼んでみるかなあ？」

「ああ。それがいい」

「そうだね、じゃあそのアイディアいただこう。近いうちに会う予定もあるし」

俺がそう言うのと、ドワーフ達は力強く頷いた。

「なら、それまでに装飾を終わらせておくか！ 仕上げは任せておけ！ どこに出しても恥ずかしくない剣に仕上げてやる！」

その言葉は非常に頼もしく、俺はこの剣が最高の逸品になることを確信していた。



「ついに完成ですか……」

「うむ……ここまでこぎつけるのに相当な労力を費やしたが、ついに形になった」

その日、俺が竜の谷へ出かけたのは、ある物が出来上がったという知らせを長老さんから聞いたからだ。ちなみに剣は出来上がっていて、今回完成したのはそれとは別物である。

やってきた竜の神殿で、ラスボスのように大きな石の台座に座っている黒い鱗の長老さんは、竜の顔でもわかるほど、心底上機嫌だった。

「これも魔法使い殿の協力の賜物だ、いや本当に感謝の言葉もない！」

「いやいや、俺なんてそんな。それで？ これはどういったお酒なんです？」

そう、お酒。

しかも竜による、竜のために作られた、竜専用のお酒である。

納得のいく物が完成したのだと言う長老は、ラベルも貼っていないその瓶を誇らしげに掲げ、俺に見せつけた。

竜サイズなので、とんでもなくでかい瓶の中には、透明の液体がなみなみと入っている。

「ここにたどり着くまでに幾多の困難があった！ 命名、『竜殺し』！ 竜であっても、コップ一杯呑めば酔いが回る強烈な一本よ！」

長老さんの紹介したそれは、割とシャレにならない代物だった。

毒を飲んでも平気な竜が、コップ一杯で酔うと？

そりゃあ本当にアルコールなんだろうかと思わなくもないが、長老さんがこれ以上ないほど嬉しそうなので、俺は突っ込むことなく穏やかに頷いておいた。

「それはまた、強力そうなお酒ですなあ」

「もちろん！そこは竜のための酒だとも。他の種族が呑むことなど、毛筋^{けすじ}ほど想定していない！口にすれば、死人が出る可能性すらある！」

「死人が出る?! ……思い切りましたね」

「思い切る？ いや、まだ足りぬさ。息子は一口だったが、私は実はコップで二杯はいける。ただし、酔うことに力を入れすぎて作ったせいで味はいまいちだ。今回は最初の目標に沿った物が出来たというだけで、手を加える要素はいくらでもある。しかし、時をかければそれも叶うだろう」

長老さんは、酒の出来に完全に満足しているわけではないらしい。

「まだこれも、ひとまず出来たって感じなわけですね」

「その通り。実に奥深い物だよ。また新作が出来上がったらお見せしよう。もともと、人間が呑める保証はないがな！ はっはっはっ！」

俺はこんなにテンションが高長老さんは見たことがない。

長老さんのお酒に関しての知識量がすごいことは知っていたが、作ることにに関してはノウハウが

なかった。このお酒を作るのに、さぞ苦労したことだろう。

しかし長老さんの笑い声からすると、苦労の分だけ楽しんでやっているのは間違いなさそうだ。

だからこそ俺は、少しだけ残念に思った。

「なるほど。呑んでみたかったな」

体が特別丈夫な竜の中でも酒豪^{しゅこう}と豪語^{ごうご}する長老さんが気持ちよく酔える一本など、人間基準で考えれば無茶な代物となる。

俺が心から残念そうにしていると、長老さんは笑みを深めて言う。

「確かにそれは残念だ。魔法使い殿なら、魔法を使えば呑むことも出来るだろうが、あまり竜に合わせて無茶をするのもいいことではないだろうからな。魔法使い殿もやはり人間のだから」

長老さんからかけられたのは、俺にしてみればとても珍しい、心配の言葉である。

俺は、その優しい言葉を噛み締めて頷いた。

「いや、まったくその通り。無茶が利くからといって調子に乗っていると痛い目にあうもんですよ」

「ほほう。貴方でもそのようなことが？」

長老さんは興味深そうに聞いてくるが、そんなに面白い話でもない。

「ええ。魔法で失敗することなんて未だにざらでしてね。やりすぎて反省するなんてのもしょっちゅうですよ。なんともうまくいかないもんです」

魔法でなんでもどうにかなると高をくくっていると、思ってもみないところで失敗をする。安易に考えていると、後になって何かしら問題が出てくることなどよくある話である。

「ふむ。やはり魔法使い殿の魔法をもつても、すべてうまくとはいきませんか」

長老さんのそんな問いに、俺は神妙しんみょうに頷いた。「そうしたいとは思っているんですが、いい感じのところを模索中です。俺もまだまだ未熟ということかと」

出来ればもう少し何事もうまくやりたい。

失敗の数々を思い出し、頭を掻く俺の情けない顔を見て、長老さんは笑っていた。

「なるほど。日々精進しやうじんというわけですね」

「そういうことです。魔法使いとしても人としても、ちようどいいバランスを保っていききたいものですね」

これは俺が心から思っている目標だった。

長老さんが、手にした酒を眺めながら言う。

「ふむ。ちようどいいというのは意外に難しいものですからな。この酒もそうだ。竜に合わせたからこそ私は心から楽しめるが、同時に別の何かをふるいにかけている。今ここでこの酒を酌くみ交わせないことも、その結果だと言える」

「そうですね」

長老さんは俺の前に瓶を置く。

「だが、それは悪いことばかりではない。こうして、この酒がここに存在すること自体喜ばしいものだ。魔法使い殿の魔法は、そういう尖とがったところも含めて、『ちようどいい』バランスを保てるだろうと、私は思う」

「あははは。精進しますよ」

なんだか照れくさくて、俺のことをかなり評価してくれているらしい長老さんに、そう返事をするのが精一杯だった。

「なんにせよ。向上心があることは実に素晴らしい。息子にも見習わせたいものだ。どうですか、アレは？ 親しくさせていたideているようだが？」

だがしかし、長老さんの息子、通称スケさんを話題にすると、俺の顔は強張こわばってしまった。

というのも、俺の脳裏にとある情景が駆け巡ったのだ。

主に、ピンク色の服を誰より着こなし、人間の女の子に喝采かさいを送る竜の姿が。

「あー……うん。いやごめんなさい」

ひとまず謝っておこう。うん。

いきなり頭を下げた俺に、長老さんは若干ひるむ。

「……なぜ謝ることが？」

「……どう考えても、俺が良い影響を与えているとは……思えないから、ですかね？ この間も、

ずいぶん危険な目にあわせちゃったし」

スケさんが夢中になっっている趣味の話と微妙にずらしたのは、俺の罪悪感ゆえだ。

スケさんの真の問題は別にあるけど、言えるわけがない。

もつとも、危険な目にあわせているというのも、こちらはこちらで結構な問題ではあるわけだが……

しかし、長老さんに見ればどうでもいいいらしく、なんだそんなことかと表情を崩した。

「危険な目にあうことは、アレの望むところでしょう。それについてはむしろ感謝したいと思っていたくらいだ。実際息子は、魔法使い殿と行動するようになってから、より強くなりました。竜族の若者からも慕われているようだし、精神的にも一回り成長しているように見える」

気分よく語る長老さんだが、そんな彼を前にして、俺の脚は密かに震えていた。

確かに、それは間違っではない。

ごく狭い範囲では、スケさんは竜族に限らず、様々な種族から熱い信頼を勝ち得ている。ごく狭い趣味の世界という範囲では……

「そ、そう言っていたら、うれしいな……ええ、とても」

「最近は何か、竜族にふさわしいような、例えば逸話になるようなことはありませんか？」

逸話に該当しそうなエピソードは、掃いて捨てるほどある。

「逸話……ありますね。伝説が作られそうなやつが」

「ふむ」

差し当たって思いつくのは、神族についてだ。

「危険な目にあわせたっていうのも、そのことです。この間なんて、神族を名乗る雷お化けの一撃を頭で受け止めましたからね」

事件としては女神の恋愛相談だったわけだが、それは別としても、スケさんは神族相手によくもまあ死なずに立ち回ったものだと思う。

初耳だったらしく、長老さんはぎょろりと大きく目を見開いた。

「神族ですか……それはまた懐かしい連中が出てきたものです。しかし、その攻撃を受け止めた？息子がですか？」

「ええ、それはもう見事に。ダメージはあったみたいですけど、休めば復活しました。さすがつてところです」

実際あれは、天然の雷さえ遥かにしのぐ威力だったように思う。神族と名乗るだけあって、扱う方も桁違いだった。

長老さんはそのまま黙り込んでしまったが、そこで黙られるとそわそわしてしまう。

沈黙が、心に痛い。

これまでの会話を思い返しても、まずかった部分は大いにある。

ちよつとも突かれれば、アイドル関係のあれこれに話が踏み込んでいきそうな気さえする。そ

んな不安に駆られて、俺は先手を打つことにした。

俺は愛用の四次元がまぐちから、真つ黒な刀身の両手剣を取り出す。

「そ、そういうええ！ 今日俺は長老さんに頼みたいことがあったんだ！ 実は先日、この剣を振り作っただけですけどね？ 竜族のお墨付きみたいなものをいただきたくって……」

出来る限りにこやかに言っただつもりだったが、長老さんはやはり無言だった。

剣を手にした俺の両手が、わずかながら震える。

「……」

無言のままだ。やっぱり怒らせてしまったのだろうか？

「……どうしました？」

スケさんについて隠していたことは、実はすべてバレバレだったんじゃないかという最悪の状況が頭をよぎって、俺は背中に汗を掻く。

心構えが出来ていないうちに、長老さんが口を開く。

「ふむ。魔法使い殿」

「はい！ ゴメンナサイ！」

「なぜ謝るのです？」

「へ？ イヤ！ 急に不躰ふしつなお願いだっただけかなって！ 具体的に何をしてもらうかも決めていなかったですし！」

「ああいや……いい剣ですな。こちらこそ申し訳ない、少し考え事をしていましてね」

長老さんは俺のビクついた様子を見て若干不思議そうにしながらも、真剣な表情になって——妙な話を振ってきた。

「……ふむ、魔法使い殿。申し訳ないが、先に一つ、私の願いを聞いてもらえないだろうか？」

「え？ まあ長老さんにはお世話になってますし」

急に改まられると、今度は俺の方が困惑してしまう。俺としては断るつもりもないわけだが……長老さんの願い事というのは、これまた突とつ飛ひなものだった。

「ある者と息子を戦わせたいのです。その協力をお願いしたい」

「戦わせる？ ……俺が戦いに参加することですか？」

それならお断りするところだったが、長老さんは首を横に振る。

「いや。戦いそのものには、手を出さなくてもいい。無茶を言っているのはわかっているが……」

更に何か言葉を重ねようとした長老さんを、俺は右手の手のひらを前に出して遮かざった。

「あー。長老さんの頼みだし、それは大丈夫ですよ。じゃあ、俺の方も願いを聞いてもらうということだ」

「もちろんだ。竜族の名に懸けて、魔法使い殿が望む物をなんとしても用意しよう」

そう言い切る長老さんの覚悟のほどからして、今回の頼み事がマジなものだというのは想像が

いた。

長老さんには本当に色々世話になっている。本音を言うところとちよつと怖くなってきたが、日々精進せねばと先ほど語ったばかりである。

俺は思わせぶりに唸^{うな}って、長老さんの顔を見上げた。

「ああ、いえいえ、望む物といつても、俺の頼みはさつき伝えた通りですよ。それでは交渉成立だ。俺はスケさんと誰かを戦わせるために全力を尽くす。長老さんはこの剣に名前を貸してくれるってことで。竜の祝福とか竜が認めたとかそういう……本の帯みたいな感じでいいので」

俺がそう提案すると、長老さんは眉間^{みげん}にしわを寄せた。

「それでは条件の釣り合いが取れていないように感じる。他に欲しい物はないだろうか？」

長老さんにそう言われて、俺は少し考えた。

バランスは確かに大事である。

それならと、要求する品はすぐに見つかった。

俺は、長老さんが手に持つ物を指さす。

「それでは、欲しい物が一つ」

「？」

「そのお酒を一本。それで引き受けますよ」

それで今回受けた依頼、出来る限りクエストに応えることにする。

俺がそう言うと、長老さんは驚きながらも苦笑して大きな酒瓶を差し出す。

「ふむ……感謝する」

長老さんは俺に礼を言って、頭を下げた。

「いやいや、長老さんともスケさんとも今後も仲良くしていきたいと思っっていますからね。それに双方納得出来るのが、『ちようどいい』ってのもんでしょ？」

とは言ってみたものの、いったい長老さんのお願いがどういうものなのか、もやもやしていたのもまた事実。

格好をつけて詳細を聞かずに引き受けてしまったわけだが、今回のお願いは、俺が思っていた以上に大事^{おおもと}だったのである。

「よし、こんなもんでいいかな？ いや、もうちょい硬くしとこう」

目を改めたある日、俺は竜の谷にてひと仕事していた。

具体的な俺の仕事は、竜の神殿周辺に強力な結界を張ること。

結界は張り慣れているが、お願いされたその範囲は広大である。地面の底までガッツリと、そして中で飛び回れるほど広々と。

俺は手を空中で滑らすように動かしながら、より強固になるように何層も結界を張り巡らせていた。

俺くらいになると、強度はもちろんのこと、形にもこだわる。

今回の形は、リングをイメージして、きっちり正方形である。

作業中、空に影が射したので見上げると、スケさんが空から落ちてきた。

最初の頃は、この登場で度肝とこもを抜かれたっけ。

ズドンと着地して現れたスケさんは人間の姿を取っていて、作業を続ける俺に話しかけてくる。

「どうもタロー殿、お疲れ様です。父上自らタロー殿に頼み事をするとは珍しい」

「そう？ 頼み事ならこれまでにも結構されているけどな？ 元の姿でも使いやすいパソコン一式

とか、蒸留酒の下調べとか」

「い、いつの間に？……」

スケさんは驚いていたが、長老さんとは他にも交流が多々あるのだ。

「その代わりに、おいしいお酒を紹介してもらったりしている。長老さんのブログは人気のコンテ

ンツだし、こちらもお世話になっているとも」

「はあ……さすが父上というか。ネットを使いこなしていますな。あまりそういうことに長けているイメージはなかったんですが……」

「君が言うかね？ 俺からしてみたら、そこはさすが、スケさんの父親だと納得してしまうけれど」

そもそも最初は、竜がパソコンを使うって発想からしてなかった。

スケさんにしても長老さんにしても、今や俺よりもうまく活用しているのは間違いない。

「そうですか？ ふーむ、しかし父上が変わったことをし始めたのは最近ですよ？ 例の酒を作りたいと言いだしたのもそうですし」

「あーまあ、そこも実は一枚噛んでる。設備投資は主に俺だし。今回の報酬は、そのお酒の完成品なわけだけど、思ったより早く形になった」

俺としては、なかなか互いに利のある取引だと思っただけで、それを聞いたスケさんはすごい顔をしていた。

「うわ……タロー殿、アレを呑む気ですか？ さすがに死にますよ？ タロー殿も一応人間なんですから」

「一応はいらない。人間ですけど？」

「どの口が言ってるんです？」

「失敬だな。いつだって俺は人間のつもりだとも」

そのところ大事だからと念を押したが、スケさんは疑わしげである。

「うーん、もうそれも怪しいですかね？」

「怪しくないよ！ 俺ほど人間味あふれる人間もいないってば！」

更に人間アピールを続ける俺に、スケさんは首をかしげた。

「どうなんでしょう？ この間だって新たなユニットについて話した時、ずっと話し続けてたじゃ

ないですか？ 十日連続でそうだった時は、さすがに人間離れしてきたなと思いましたが？ 私でも十日は気だるさを感じますよ。ユーザーの中にはアンデッドとかも普通にいるんですから、いちいち対応していたら普通は死にますって」

「あー……無茶だと思っはいたんだね。俺も薄々感じていたんだけど。途中で止めてくれてもよかつたんだよ？ 話の途中とかでも全然……」

「いや、どこまで話が続けるのかなと、途中から面白くなってきた」

「面白半分かい！」

「はっはっは！ 私も議論に熱中していたことは否定しません。ついつい時間を忘れてしまします」

「それはそうんだけど……こんなことばかりしてるから、俺はいつまでたっても周りを困らせてしまうんだろうな」

おちよくられてしまったが、スケさんに同感である。魔法で疲れも誤魔化せるならなおさらだ。俺が人間離れして見られてしまうのは、おおよそ自己管理の甘さが原因だった。

「それで？ 今回はちゃんと寝てきたんですね？」

スケさんの口調が若干変わった。俺は磐石だばんせきという意思を込めて頷く。

「もちろん。今回の頼み事は大掛かりだったからね。そういうスケさんの調子はどうよ？」

「私は常に絶好調ですとも。いつ何時なんとき、理想の女性に出会えるかわかりませんからね！」

「うん。今日も元気そうで何よりだ」

俺はようやく美しい結界を張り終えて、それまで背を向けていたスケさんを振り返る。

いつも通りのお気楽なやり取りに安心して俺は、すぐにそれが勘違いだったことに気がついた。

なぜなら、彼の表情は見るからに強張っていたからだ。

「元気そうだと思うけど……そうでもないみたいだね」

スケさんにはあまりにも露骨ろつこだから、指摘してしまった。

スケさんは苦笑いを浮かべながら自分の顔に触れる。

「顔に出っていましたか？」

「それはもう。何かと戦うとは聞いていたけど、スケさんが緊張するってよっぽどだな。相手はまだ来ていないみたいだね」

相手の詳細について、長老さんが最後まで語ることはなかった。

それでもスケさんに張り合えるくらいだから、相手の相手だろうと予想はつく。

そのあたりを察して結界強度は高めておいたが、スケさんのただならぬ様子から、どんな試合をやらかすのか不安になってきた。

スケさんは竜の神殿を遠い目で眺めている。

「いえ。相手はもう来ています」

「へ？ そうなの？」

「しかし、どんな相手かも知らずに結界を張ってたんですか？」

「まあ。長老さんは当日教えるからの一点張りで、頑なに教えてくれなかったからなあ」

「よくそれで引き受けましたね？」

「そりゃあ、今までの信頼の積み重ねさ。多少無茶でも目を瞑るくらいの信頼関係が出来てる。でも、長老さんらしくないといえぱらしくなかった」

スケさんはそれだけのことで、何か察したようだった。

「ああ……そうですか。そういうことか」

「何か知ってる？」

「いいえ。今回は……タロー殿は手を出さないでいただきたい。どんな結果になろうと」

「おう？ そう聞いてはいるよ」

「そうですね。なら、私から言うことはもはやありません」

スケさんは頷いて、結界に向かって歩いていった。

どうにも態度が硬い。その後ろ姿からさえ、緊張がひしひしと感じられた。

俺が用意した結界の前に立つスケさんは、さしずめ試合に臨むボクサーのようだ。

スケさんを入れ替わるように、ズズンと空から翼を広げてやってきたのは、長老さんだった。

スケさんと同じように黒い鱗を持った立派な竜が、俺に深々と頭を下げる。

「タロー殿。このたびは、ご協力まことにありがとうございます」

「……ずいぶんかしまっていますね」

長老さんもまた、スケさんに負けず劣らず緊張しているのがわかった。

戸惑う俺に、長老さんは更に追い討ちをかける。

「それはもちろん。今日という日は、竜にとって重要な日になる」

長老さんが視線を向けた先を目で追って、俺はぞっとした。

恐ろしい数の竜が空を埋め尽くしていて、結界の周囲を旋回していたのだ。

ファンクラブで集まる数とは、規模が違う。

それはまるで、世界中の竜が集まってきたようですらあった。

「何……本当に何が始まるんです？」

何かとんでもないことに手を貸しているんじゃないか、俺は今更ながら青くなったが、不安の後押しは続く。

集まってきたのは、竜だけではなかったらしい。

「ただ事ではないと理解しておけば大丈夫だとも！ すぐにわかるだろうしね！」

「その通り。タロー、お前は全員を無事にここから帰すことだけ考えていればいい」

そう言って現れたのは、金髪のやたらきらびやかなエルフ、セレナーデ様。そして、緑色のドレスを着たピクシーの女王様。

そろって見るのがあまりない顔ぶれだった。

「あれ？ セレナーデ様に、女王様まで？ どうしてここに？ というか、いつもの花はどうしたんです！ 登場がなんとか普通ですよ!？」

だが、俺としては二人がそろっている以上にそっちの方が驚きで、思わず声を上げてしまった。いつもは咲き乱れる花とともに現れるというのに。

女王様は不満そうに唇を尖らせて言う。

「そっちか！ 馬鹿を言え、妾として場はわきまえるわ！」

「今回ばかりは仕方がないよね！ 今日の主役は僕ではないから！」

さらりと答える二人に、俺は更に戸惑ってしまう。

「……信じられない。登場の仕方ですら二人に逆に諭される日が来るなんて。近いうちにすごい天災と起こりそう」

「なんでだ！ 貴様にだけは言われたくない！」

「言いますー。だって登場だけは俺普通ですしー」

「まあまあいいじゃないか！ 僕らの登場が天才的に美しいのは、自明の理なのだしね！」

「……いや、お前とだけは一緒にされたくない」

「おやおや、手厳しいなクイーン！」

「リアルでクイーンと呼ぶな。殺すぞ」

ぱちんとおでこを叩いて愉快に笑うセレナーデ様は、やっぱりにぎやかな人である。

騒ぎによく顔を出すセレナーデ様はともかく女王様までお出ましとは……こいつは本当にただ事ではなさそうだった。

そして彼らが、花を咲かせずに登場したことは、今回のことが俺に普通とは違うという印象を抱かせるのに十分すぎた。

セレナーデ様は気安い感じで、身構えたままの俺の肩を叩く。

「ともかくだ、タロー。僕達がここにいる理由は明白さ！ こんな重要なイベントを見ないわけにはいかないじゃないか！」

「我々には役目もあるしな。他にも沢山来ているぞ？ それだけ大事だということだ。ほら見てみる。はしゃいでいる奴もいるらしいから」

「なんですそれ？」

女王様の視線の先には、高速でこちらに向かってくる竜がいた。

かなり体の大きな竜である。そしてその体色は黒——いや、若干紫がかった色をしていた。

「長老！」

そう叫んで墜落したみたいに降りてきた紫竜は、その勢いそのまま地面を派手に転がって、早々に竜の長老さんに詰め寄る。

その声は明らかに抗議じみていたが、長老さんは慌てずに彼に向き直った。

「うむ……お前か」

紫竜は俺にも見覚えがある。確か魔王城で四天王をやっていた、魔族所属の竜だ。

彼はよほど急いで来たらしく、肩で息をして、それが整うのも待てないようだった。

「あ……あいつがああの方に挑むとは、本当なのか！」

ようやく言葉を発した紫竜さんに、長老さんは重々しく頷く。

「ああ。機は熟した。お前も見えていけ。魔族と名乗っていようとも、お前も竜の一翼だ」

「……本当なんだな」

なぜか愕然とする紫竜さん。その拍子に、ちよつとずれた視線が俺に向いた。

一応知り合いだし、手を上げて挨拶しておこう。

「ええつと、確か、マオちゃんのところに行った四天王の微妙に紫の？」

「黒竜だ！ 妙な覚え方をするんじゃない！ ……そうか。貴様がいるから、封印を解く気になったのか！」

「え？ 俺がいるからなの？」

いまいち事情を知らない上に、妙なことを言われて更に混乱する。

長老さんの方に助けを求めると、長老さんはそうではないというように首を横に振った。

「いいや……あやつが十分に成長したと判断したというのが一番の理由だよ。勝てるとしたら、あやつをおいて他にない。これは竜族の総意だ。だからこそ封印を解くことになった」

「馬鹿なことを！ 相手は竜王だぞ！ いくらあいつでも勝てるわけがない……！」

「竜王？」

紫竜さんの口から飛び出した名前は、俺にはまったく聞き覚えのないものだった。

セレナーデ様は名前が出てしまったことに、なぜかつまらなさそうにする。そして竜の神殿を指し示して、その名について語りだした。

「ああ、言っちゃった。そうだよ、竜王だ。かつてすべての竜を従えていた竜の王。この場所は彼の墓所ということになっているが……彼は封印されているだけなんだよ。今もなお、この場所にね」

「またいかにもヤバそうな……」

「それはもうヤバイとも。君も覚悟しておくことだね！」

セレナーデ様の言葉に、俺は完全に怖気づいた。

だけど、今更逃げだせるわけもなかった。

俺は大きな大きなため息を吐いて、心の中で仕切り直す。

「……それにしたって、封印とはまたまどろっこしいことをしたもんです。なんだって、そんな面倒なことを？」

もう少しだけ状況を整理しておきたいと思って、素直に尋ねた。

生き物をそのまま封印なんて真似、そんなに簡単じゃないだろうに。

竜のでたらめさは、俺も知るところである。その竜の封印なんていうものをやった魔法使いがいるとしたら、ずいぶん手の込んだことをしたものだ。

俺の疑問に、長老さんが答える。

「彼は強すぎた。だから、封印することしか出来なかったのだ。いつか竜の中に自分を倒せる者が現れたら解くようにと言いついて残して、彼は自ら封印された。心優しき竜王は、自らの滅びの望みを未来へと託した」

いやいや、そんな重要な約束に、俺を巻き込まないでほしいんだけど。

喉元まで出かかった文句を呑み込んだのは、スケさんを思い出したからだ。

正確には、スケさんの力を、である。

かつて俺は、スケさんが一撃で海を吹き飛ばしたのを見たことがあった。が、それでも手心を加えていたのは見てわかった。

はつきり言つて、スケさんが本気で戦っているところを見たことがない。

そんなスケさんが戦うとなれば、周辺の被害はとんでもないことになるだろう。

そこまで考えて俺もようやく、長老さん達が俺に何をさせたいのかを理解し始めた。

桁外れの竜が二体、死に物狂いで戦うわけだ。何が起ころかわかりはしない。

俺なら、その被害を最小限に留めることが出来るかもしれない。

つまり俺は、竜族の悲願をいくらか無難にやり過すために、どうもがつつりと巻き込まれたみ

た이었다。

「あー、なるほど。責任重大そう。じゃあ、俺はその竜王さん？ と、スケさんの戦いで、出来る限り周辺の被害を出さないようにすればいいと？」

「そういうことです。すみません」

はつきりと口に出して確認すると、ばつが悪そうに長老さんは頷いた。

「申し訳ない。本来であれば、竜族だけで解決せねばならない問題だとは思いますが。ともかく魔法使い殿、竜王がその気になれば、十日で世界は炎の海に沈むと言われております。故にこの戦い、他の竜ですら立ち入ることが出来ないものになるでしょう。だが、勝負の行方はあやつの実力に委ねていただきたい」

「それは……負けそうになつたとしてもつてこと？」

「……あやつも納得して、この場に来ております」

長老さんの表情は真剣で、暗にスケさんが死んだとしてもと言っていた。

これつてまずくない？ 的な視線を、俺は女王様に向けるが、女王様もこの戦いを止めるつもりはないようだ。

「事情はわかつただろう？ だから皆集まっているんだ。今日は、偉大な竜王の埋葬と誕生の日なのだよ」

そう言われて反射的に俺の眉間にしわが寄る。格闘技の試合を観戦するくらいの軽い気持ちで来

てみれば、とんでもない話だった。

「なんだかなあ……」

それが竜の考え方で大切なことなのだろう、そう理解することは出来る。だけど、やはり気分のいいものじゃない。

そのあたり、俺の考えることがわかっていたからこそ、長老さんもギリギリまで黙っていたと察せられた。

「申し訳ない。だが、これこそが竜の望み。ご理解いただきたい」

長老さんに重ねて釘を刺されて、俺は黙るしかなかった。

「我が血族の血によつて縛めを解放せよ」

竜の神殿内部にある長老さんがいつも座っていた台座で、封印解除の儀式は行われた。

封印を解く役目は、セレナーデ様と女王様である。

台座の中心で人差し指を浅く切った二人は、一滴ずつその血を台座に垂らし、声をそろえて呪文を唱えた。

ちよつとデュエットっぽい、とか思ったのはナイシヨである。

その血が台座に触れると、すぐに変化は現れた。

台座に亀裂が入り、連鎖的に隠されていた魔法陣が反応して、地面が振動し始めた。

「よし！ これで大丈夫だ！」

「さあ逃げる！ 崩れるぞ！」

「そうなの!? 崩れるなら前もって言って！」

俺は二人の肩をつかんで、結界の外まで転移した。

結界の外に戻った俺達は、赤茶けた大地が崩壊していくのを見た。

振動は地震のように谷全体を震わせていて、まともに立っていられない。

「ふう。いやあ焦った！」

「妖精族二人以上の血が必要という条件は、なんなんだろうな？」

「もちろん！ 封印の魔法を担当したのは、エルフとピクシーだからね！」

女王様がぼやくと、セレナーデ様は光が漏れ出す谷を眺めながら平然と答える。

封印を解除するキーは妖精族だったらいいが……そこで俺は一つの疑問に行き着く。

「ひよつとして、二人つて竜王つて人と同じ歳……ぬお！」

言い切る前に、女王様の右拳が頬を掠めていった。避けていなければ、顔がへこみそうな一撃だった。

「違うわタワケ。封印したのは先代だ」

「やれやれ、僕はともかく女性に歳を聞いちゃだめだよ」

「すみませんです、はい」



俺は女王様の鬼気迫る殺気に、全力で謝った。

「でも、いいのかな？ あんな貴重そうな建物壊しちゃって」

残しておけば絶対文化財とかに指定されそうな神殿が崩れる様を、俺はがくがくしながら見守る。
「そのための建物ですからな」

「そんなものですか？」

「ええ……もちろん。そして、もう二度とこの場所にコレは必要ない」

長老さんのお許しが出たところで、崩落——封印が解かれる。

同時に、谷全体が禍々しい魔力で満たされていった。

神殿の下からせり上がってきたのは、無数の光る文字に繭のようにくるまれた何か。魔力で編み上げられた光の繭は、ゆつくりと空中に浮かび上がると、碎け散ってしまった。

出てきた物を見て、俺はすごく動揺した。

「な、なんだあれ……」

三回ぐらい目をこすったかもしれない。

光の繭から現れたのは、鎧を纏った立派な竜だったからだ。

不思議な光沢を持ったとげとげしい金属の装甲は、まぎれもなく鎧に他ならない。

「あの……なんであの竜さん、鎧を着ているんでしょうか??？」

恐る恐る指をさす。

今まで武装した竜なんて見たことがない。

俺は、なんだかトレーディングカードゲームにでも出てきそうな、ラスボス感満載の竜王の姿に、感動半分、驚き半分で震えていた。

見入っている長老さんに代わって、セレナーデ様が教えてくれる。

「あれは鎧じゃないよ。拘束具さ」

「拘束具!？」

それはまた、キュンとくる言い回しだこと。

ならばまさか、登場が派手なだけでなく、今から真の力を解放とうとでもいうのだろうか？ いや、そうに違いない。

だとすると、竜王とはどれだけ押さえるべきところを押さえているのだ。俺は賞賛したい気持ちでいっぱいだった。

「そうだよ。あの鎧はドワーフがしつらえた物だと言われているね。装着者の力を大幅に削ぐ効果があるんだ」

「なんですその設定！ めちゃくちゃ強キャラ感半端ないじゃないですか！」

「そりゃまあ強いさ！ 他にもあの手の手で弱体化して、ようやくエルフは彼を封印したんだからね！」

「やっぱりその封印とやらも強力なものなんですよ？ 見ましたが、あれはいいものだ。何

より驚くべきは、手間と時間を惜しまない洗練された魔法陣。うん。あんな大掛かりな封印は滅多に見ないですもん！」

いい仕事に対して魔法使いとして若干興奮してしまった俺だったが、セレナーデ様は彼にしては珍しく言葉を濁した。

「それは、そうだけど……君も知ってるだろう？ 同じのかけられていたじゃないか」

「ええ？」

ちよつと待て、今なんと言ったかこのエルフ。

驚いてセレナーデ様を見ると、彼はハハハと乾いた笑みを浮かべていた。

「ホラ。君が初めてエルフの里にやってきた時に、ハイエルフの子達がみんなださ……」

「……」

俺があの封印をかけられたと？

そんなとびきりやばそうな目には……と、そこまで考えて、エルフの里での過去の出来事が、猛烈な勢いで蘇ってきた。

そう、エルフに初めて会った日の、俺が問答無用で封印されかかったあの時を。

「……アレか!？」

「だよー。まさか、一瞬でパリンといくとは思ってなかったみたいだね！」

笑うセレナーデ様はいや参ったという感じにしているが、俺も含めた一同はしらっとした視線を

彼に向けた。

「なるほど……そんな自信作だったわけですか」

竜王を封印した結界魔法なんて、なんでもかんでも封印出来そうだし。

のこのこやってきた魔力だけでつかい人間なんて、特別な準備がなくてもちよろいもんだと思っただけに違いない。

やべーよ。マジエルフおつかねーよ。

あんな竜王に使った結界とか、人に向けて使わないでほしい。

謎の魔法の出自が思わぬところでわかったわけだが、ひとまずそれは置いておこう。

なぜなら、俺が作り上げたバトルフィールドで、すでに俺の友人が、臨戦態勢で竜王を見上げていたからだ。



「……あれが」

一匹の竜は、戦場に向かう。

対峙するのは伝説である。

恐怖がないわけではない。だが、それにも増して彼の胸中を満たすのは、ただただ歓喜だった。

まともに自分と戦おうとする者がいなくなって久しい。

いつしか竜は、自分を抑えることを覚えていた。

自分からは仕掛けず、相手の攻撃を受けて耐える。そうでもしなければ、まともな戦いにならなかったからだ。

だが、今回は立ち向かう側、それも相手は遥かに格上だと確定している。

竜にとってそれは本当に久しぶりの感覚だった。

押し留められていた凶悪な魔力が、一枚また一枚と封印が剥がれ落ちるたびに濃くなっていく。そして、竜王が縛めから完全に解き放たれたその瞬間、天地が震えた。

声帯の限界を超えた咆哮には、理性の欠片も感じられない。

竜王は、狂気と殺意に満ちていた。

今まで仮定でしかなかったことが、現実として目の前に現れた。

あの殺意は、疑いの入る余地がないほど、明確にこちらに向けられている。

「スウ——」

竜は息を思い切り吸い込んだ。

人の姿から黒い竜の姿に変化しながら長い首を反らし、竜として極限まで鍛え上げたすべての力を、今この瞬間に集約する。

まずは一撃、全力で！

竜の全身から蒸気が上がり、口を開くと真っ白な閃光が放たれた。光が上を通り過ぎるだけで、地面はめくれ上がった弾け飛ぶ。

狙いももちろん、竜王である。

だが竜王は、強力な竜のブレスを、同じくブレスで迎え撃った。

巨大な熱量がぶつかり合った刹那、何も見えなくなり――

視界は戻る。

竜は興奮でチリチリする頭で何かを察知して、右腕を見た。

そこにあるはずの右腕がない。

完全に塵になつて消えた右腕を一瞬だけ確認し、竜は叫ぶ。

それは痛みからの悲鳴などではなく、攻撃的な咆哮だった。

「なるほど――最強の竜とはこういうものか！」

竜は竜王に――竜の頂点に挑みかかった。



「……！！」

ドンツと衝撃波が結界越しに伝わる。はつきり言つて想定外だった。

俺は冷や汗を掻きながら更に結界を重ねがけしつつ、現状を解析する。

結界の中で渦巻く熱は、たった一発のブレスでもたらされたもの。中は尋常じゃないことになっているのが、俺には手に取るようにわかった。

「な、なんだこりゃ!? おいおい……ちよつと想定外がすぎるぞ！」

「グオオオオ!!」

咆哮を上げ続ける竜王は、紛れもなく強大な存在だった。

今の攻撃でスケさんの右腕は吹き飛ばされ、傷口から血が赤い蒸気になっていくのを見て、俺もさすがに動揺した。

「スケさん!? 大丈夫なのアレ！」

「いや、まだこれからだ……」

同じ惨状を見ているはずの長老さんは、目を細めてそう呟く。

「これからとか！」

「ああ、あのダメージなら怒りに吞まれる」

傍らにいる紫竜さんも、まだこれは始まりに過ぎないといった語り口である。

その言葉の意味は、俺にもすぐに理解が出来た。

「――!!」

竜王と同じように咆哮を上げたスケさんの失った右腕が、再生したからだ。

ほぼ一瞬で、傷一つなく。弱どころか、むしろ前より力強い腕が、である。

俺はパチクリと瞬きして叫んだ。

「なんじゃあれ！」

驚愕する俺に、長老さんはスケさんから目を離さぬまま説明する。

「竜は頑強な体が最大の武器だと思われているが、そうではない。竜の最も秀でた力は、生命力そのものだ。腕がもげようが足が切れようが再生する。もつとも、アレほどまでの速度で再生する者は稀だが」

「いやいやいや、それもだけど！ なんだかスケさんの様子がおかしくない!？」

なんとというか、明らかにスケさんの目が怖い。

スケさんの咆哮の質が変わり、俺には竜王とその姿がダブって見えた。

この状態を、長老さんは当然のように知っているようだった。

「アレこそが、竜が最強と言われる所以。興奮が限界を超えるとああなる。体の強度も再生力もタガが外れ、相手を殺すまで暴れ続けるだろう」

なるほど。スケさんの様子が普通ではないのは、いわゆる暴走状態みたいなことになっているかららしい。

そしてあの状態になれば、腕一本くらい生やすのは造作もないとは。

○メック星人だって、もう少し苦しげに再生しそうだった。

「怒ったところは見たことがあったけど、あんなつたのは初めて見た」

「そう簡単に見える姿ではない。大抵はああなる前に片がつく……だが、竜王様は長い戦いの中で幾たびもあの状態になられた。最初は、敵を倒せば理性を取り戻していた。しかし、あの状態は回数をおこなすほど理性を取り戻すまでの時間が長くなる。いつしか限界を迎えた竜王様は、自らの最期を自分で決めになったのだ」

「それで、自分で封印を？」

「その通り。まだ止められるうちに、手を打ったのだ。自らを縛る鎧を着込み、戦いの場に赴いた。そして、敵こそ討ち果たしたが暴走は止まらず、最後の理性で力を抑えた。そうして後を託された者達は、彼を封印した。暴れ続ければ、理性を取り戻したかもしれないが、そんなことをさせれば世界が滅ぶ。あの竜王様と戦うのなら……同じ状態になってようやく相手が出る。つまり、ここからが本当の戦いなのだ」

そう言い切る長老さんの手は震えていた。

これからが正真正銘、竜の決闘なのだ、俺はそう理解して生唾を呑み込んだ。

本当にスケさんが死にかねないことも、ようやく実感を持ってわかった。

戦う前のスケさんを思い返す。今になってその覚悟がよくわかって、俺はなんだか悲しくなった。「スケさん……俺は嫌だぞ？ これですらよならなんて」

力を解放したスケさんは、スピード、パワー、どれをとっても正気の時とは比べようもなかった。ジェット機のように加速して、竜王に近接するとゼロ距離でプレスを叩き込む。

「やったか！」

紫竜さんが歓声を上げたが、それはフラグだやめておけ。

案の定、閃光の中から煙を吹いて姿を現した竜王は、体に纏った鎧が砕けてはいたものの健在だ。

「ん？……鎧が砕けた？」

それってまじくはないだろうか？

そういえばあの鎧、拘束具とか言ってなかったっけ？

致命的なダメージを受けて鎧が崩れ去る。同時にあふれ出る魔力を感じ、俺は青くなった。

倒すということになればいつかは訪れていた結果だが、つまりこれまでは本気でなかったということ。

鎧を失い、現れた竜王の肉体は、鎧を着ていた時以上に張り詰め、まがまが禍々しい鱗が全身を覆っていた。

「……何あれ？ 怖すぎない？」

俺は思わず呟く。

竜王の姿は、誰の目にもこれからが本場の地獄だと思わせる迫力があつた。



竜にとって破壊衝動に流される感覚は、有り余る力のぶつけどころを得なければ到底救われないという極限状態と同じだ。

ひとたびこうなれば、何者も止めることは出来ない。

敵はまさに同格。

湧き上がる衝動に、竜の思考が塗り潰されていく。

竜は結界を蹴り、翼を広げて飛びかかる。

牙を敵の喉元に突き立てる動きには恐ろしく迷いがなかったが、待ち構えていた竜王の拳に叩き落とされて、竜の顎が砕かれてしまう。

しかし竜は瞬時に再生、逆に腕に喰らいついて、噛み千切った。

双方すべての攻撃が相手の体を壊す。

同時に新たな体が再生して、更に頑強に作り変えられた。

二匹の竜が、絡み合い、喰らい合う。

ただただ全力の応酬が延々と続く。

しかしほとんど致命傷ともいえる攻撃が、二匹の竜の再生力の前には、致命傷足り得ない。

殺す殺す殺す殺す――

立ち読みサンプル
はここまで

竜の頭の中には、もうそれだけしかなかった。

「グロアアアアア！」

「ギャオオオオオ！」

一体どれほどの時間こうしているのかさえ、一匹の竜にはもはやわからない。



「すさまじいな……」

長老さんの声は心なしかかすれていた。

確かにすさまじいと思う。

俺だって今まで数々の戦いを見てきたが、なんとというかスケールが違った。

竜の戦いは、本当に生命力の戦いだっただけだ。

体が壊れたくらいじゃ終わらない。すぐに再生して元より強靱きょうじんになって戦い始める。

それはTVゲームのHPのように、本当に最後の最後まで相手の命を削り切らねば終わらないの
だろう。

「うぬぬぬ……泣きそうだ」

だけど今、俺は別の問題で必死だった。

戦いを誰より気にかげながら、周囲の状況を確認する。

結果は地中深くまで達しているのだが、すでに結界の中の地面がごっそりと蒸発して四角く切り
取られたように消失していた。

すでにあの結界中では、地面すら存在を許されないらしい。

状況は刻一刻と悪くなっていた。

「どうしたのだ？ まれに見る好勝負に感動したか？」

俺の異変に気がついた女王様が冷やかしてくるが、俺は小刻みに首を横に振る。

「ち、違う……ちよつとこれ、どうすればいいかわかんなくて」

そしていつもと違う切羽詰った俺の声色に、女王様も非常事態を感じ取ってくれたようだった。

「？ どういうことだ」

声を潜める女王様に、俺は現状を説明する。

「……俺が張った結界に綻びほたぎが出始めてる」

「なら、補修をすればいいだろう？」

「もうやってるけど……！ ガンガンブレスの威力が上がってるんだよ、あの二人……」

これが焦りの原因だった。

俺の言っている意味がわからなかったらしい女王様は、戦いをじっと観察しながら呟く。

「どういっことだ？」